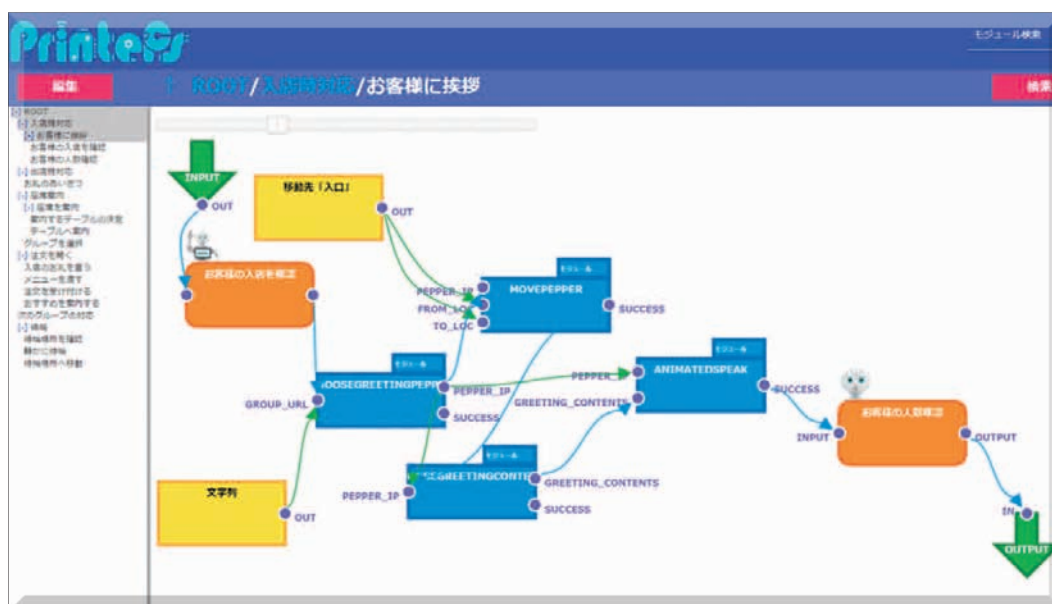


理工学部報



第65号

2016年9月20日



慶應義塾大学

最近の整数論の発展

数理科学科 栗原将人



コラム	2
最近の整数論の発展	栗原 将人
巻頭メッセージ	3
理工学部のさらなる発展のために	理工学部長 青山藤詞郎
常任理事メッセージ	4
トランスナショナル時代、ハブとしての研究大学の使命	真壁 利明
TOPICS	5
第1回 理工学部ホームカミングデー	開催 青山藤詞郎
国際情勢と留学生事情	小尾晋之介
慶應義塾先端科学技術研究センター (KLL) から産業界への技術発信	鈴木 哲也
15年を迎えた「矢上賞」一同窓会研究教育奨励基金による表彰	小尾晋之介
矢上賞 同窓会研究教育奨励基金による卒業生への授賞	
教育への新しい風／教員からのメッセージ	9
化学科／基礎理工学専攻	井貫 晋輔
応用化学科／総合デザイン工学専攻	萩原 学
管理工学科／開放環境科学専攻	山田 秀
理工学部の近況	10
各学科主任・日吉主任・各専攻長からのメッセージ	
博士課程教育リーディングプログラム	13
オールラウンド型	
「超成熟社会発展のサイエンス」	神成 文彦
複合領域型（環境）	
「グローバル環境システムリーダープログラム」	植田 利久
就職状況	14
最近の就職状況について	津田 裕之
受賞	16
人事	17
計報	18
理工学部創立75年記念モニュメントの設置	18
理工学コロキウム	19
慶應義塾大学のスピントロニクス研究	能崎 幸雄
お知らせ	20
日吉は今「Take the GIC Challenge!」	
第17回矢上祭の開催について	
KEIO TECHNO-MALL 2016 (第17回 慶應科学技術展) 開催について	

※表紙下部は、聞いて話して(音声対話)、考えて(知識推論)、学んで(機械学習)、見て(画像センシング)、動いて(動作)という5種類の要素知能モジュールをグラフィカルに組み合わせるだけで、AIアプリを自動生成するプラットフォーム PRINTEPS の利用画面です。表紙左部は、この PRINTEPS により喫茶店業務フローを記述し、カフェラテを作る双腕ロボットの様子です。表紙右部は、慶應義塾幼稚舎の理科授業「てこの原理の実験」で、ロボットアームが、糸で釣り合っている支点位置で、にんじんを切る様子で、子供達の大歓声に包まれました。(理工学部管理工学科 教授 山口 高平)

慶應義塾大学理工学部のウェブサイトは

<http://www.st.keio.ac.jp/> です。

Fermat予想 ($x^n + y^n = z^n$ は n が3以上の整数のとき正の整数解を持たない) が A. Wiles によって証明されて大きなニュースになってから、もう20年以上経ちました。Wiles は1993年のケンブリッジでの研究集会で、Fermat予想を証明したことを発表したのですが、その集会に参加していた私は、自分のよく知っている道具が次々と使われて Fermat 予想が証明されるのを見て、大変興奮したのを覚えています。実はその発表時の方法には誤りがあり、1年かけてその誤りを修正して、証明は完成されました。

あのときから現在まで、整数論は大きく発展しました。Wiles の証明で重要な役割を果たした楕円曲線という3次曲線は現代整数論の中心課題ですが、それに限っても、Wiles が部分的に証明した谷山・志村・Weil 予想が完全に証明されましたし、有限体上の解の数の分布に関する佐藤・Tate 予想や後述する楕円曲線の岩澤主予想などの重要な予想が証明されました。

楕円曲線の有理数解がどれだけあるかは、その L 関数という解析関数の $s=1$ での位数と Taylor 展開の初項の値でわかる、という Birch Swinnerton-Dyer 予想が、楕円曲線の最も重要な未解決問題として知られています。ミレニアム問題として100万ドルの賞金もかけられています。この予想に関するごく最近の研究では、 L 関数の位数が0か1のときには (L 関数の先頭項に関する部分をこめて) ほぼ証明される勢いです (Wiles の弟子の Skinner らによる研究)。これらの研究では、楕円曲線の岩澤主予想 (加藤、Skinner-Urban、Wan によってつい最近証明された) が使われるなど、岩澤理論という理論が最も重要な役割を果たしています。岩澤理論はもともと岩澤健吉先生によって創始された理論で、各素数 p に対して、 $\mathbb{Z}_p$ 拡大という無限次拡大上の整数論的な対象と p 進 L 関数との間の深い関係に関する理論です。岩澤先生は第二次大戦後すぐにアメリカに渡って、MIT とプリンストン大学でずっと研究活動を展開されましたので、岩澤理論も日本より海外の方が研究者の数が多いくらいですが、岩澤先生は、渡米以前に藤原工業大学で講師として教鞭をとられていたこともここで述べておきます。

私自身のこの方面の研究をひとつ述べると、Birch Swinnerton-Dyer 予想は Tate-Shafarevich 群という (有理数解を見つけるときに重要な) 群の元の数が、 L 関数の値で書けることを主張するのですが、私は元の数だけでなく、その構造も L 関数の値で書けることを発見し、研究を進めています。

Birch Swinnerton-Dyer 予想

理工学部のさらなる発展のために

理工学部長 青山 藤詞郎



慶應義塾大学理工学部は、世界トップレベルの教育研究拠点の形成のため、教育と研究の両面から、様々な形で具体的な取り組みを行っています。その一つに、理工学部・理工学研究科に所属する学部生・大学院生を対象とした奨学金の充実があります。理工学部・理工学研究科の在学学生を対象とした主な奨学金として、藤原奨学基金があります。後期博士課程在学学生を対象としたもので、その内容は、今年度からさらに充実され、年額100万円の奨学金が支給されています。理工学部創立75年記念事業募金によって設立された国際人材育成基金・資金は、毎年総額約2000万円が、ダブルディグリー制度による外国留学生をはじめ、理工学部・理工学研究科が定める教育プログラムのもとに外国留学、外国研修等を行う学部生・大学院生に対して幅広い支援を行っています。また、理工学部同窓会のご支援により、学部生を対象とした理工学部同窓会奨学金が新設され、主に経済的支援を必要とする優秀な学部生を対象として、年額60万円の給費奨学金が毎年10名に給付されています。このほか、慶応工学会育英奨学事業による奨学金、田村淳記念大学院特別奨学金、バキット奨学基金など従来からの奨学金も引き続き運用されています。一方、慶應義塾が全学部・全研究科を対象として運営する奨学金も数多くありますが、今年度より開始された研究のすゝめ奨学金については、理工学研究科の後期博士課程在学学生に対して年額70万円の給費奨学金が支給されています。同時に、今年度より、大学院学費の大幅な改定が行われ、後期博士課程の場合は、年額71万円となり、研究のすゝめ奨学金を受けることにより、ほぼ学費相当の支援が実現されています。このように、理工学部・理工学研究科に在籍する塾生への奨学金による経済支援は、一層の充実が図られており、塾生諸君がこれら奨学金制度を利用することにより、勉学と研究活動に専念し、大きな成果を挙げることを期待しています。

理工学部・理工学研究科の拠点である矢上キャンパスにおける産学官連携活動は、その地の利を生かして益々活発なものになっています。その具体例として、横浜市や川崎市などの地域産業の連携・支援活動の強化のために、

慶應－神奈川ものづくり技術実証・評価センターがあり、開設以来、今年で5年間の実績をあげることができました。また、今年度より、横浜市・川崎市との連携による社会人教育講座がはじまり、新装なったマニファクチュアリングセンターやデザインセンター等の設備を活用して、「最新工作機械による加工技術体験講座」を開講しています。また、先端研究支援環境の整備の一環として、理工学部中央試験所の機能を強化し、従来の物性計測評価支援に加えて、ものづくり支援の充実を図っています。矢上キャンパス36棟（旧数理科学科棟）を改装し、産学官連携棟として、新たな地域連携サービスを開始しています。産学官連携棟には、中央試験所と企業が連携して、最先端の計測・分析装置の利用サービスを行う新たなセンターが開設されました。産学連携の新しい形として、今後の発展が期待されています。

2016年4月1日現在、理工学部・理工学研究科の学生数は、学部生4173名、大学院修士課程在籍1522名、博士課程在籍288名、合計5983名であります。約6千名の塾生諸君とともに半学半教の精神のもと284名の専任教員と150名の常勤職員が、教育と研究活動に励んでいます。慶應義塾大学理工学部は、創立100年へ向けて、さらなる発展を遂げてまいります。その様子を、卒業生の皆さまにご覧いただき、創立75年記念事業を機に築いた大学と塾員との関係を恒常的なものとしたく思います。毎年1回、「理工学部ホームカミングデー」を開催し、卒業生とご家族ご友人の皆さまが矢上キャンパスを訪れる機会を設け、理工学部の教育・研究の現況をご紹介します。また毎年開催される連合三田会の当番年に合わせて、卒業10年、20年、30年、40年の方々をお招きして、各卒業年度の結束を図ることに寄与したいと考えています。

理工学部のさらなる発展のために、教育研究活動の一層の充実を図り、世界トップレベルの教育研究拠点の形成を進めてまいります。理工学部教職員、塾員、塾生ご家族をはじめご関係者の皆様の一層のご協力とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

トランスナショナル時代、 ハブとしての研究大学の使命

常任理事 真壁 利明



高度情報通信技術（ICT）が社会のグローバル化を牽引し加速しています。研究教育活動を担う研究大学にとってのグローバル化はすでに国際化（Internationalization）の段階を通り過ぎ、トランスナショナル化（Trans-nationalization）へとその軸足を移しつつあると考えられます。研究大学はその籍をそれぞれの国に置いてはいるものの、長い歴史のもとで独自理念を掲げ地域に根づいて活動を続けている学術機関です。研究大学のリソースは言うまでもなく「人材（学生と教員研究者）」と「ハードウェア設備・ソフトウェア基盤」と「資金」です。成熟社会にあって、この3つのリソース全てをトップの状態に整備することは経済的に容易ではありません。研究と高度人材育成を国際的な連携のもとで行うことで相乗効果を上げる、国際的なハブ機関としての、役割が研究大学にいま求められています。世界中の学生や研究者がモビリティ高く、ハブとしての研究大学の間を巡回することで、多国籍環境のなかで、ユニークな研究が共同推進され、同時に個性ある高度人材育成が実現されてゆきます。これがトランスナショナル時代のハブとしての研究大学の姿であり役割です。

慶應義塾は300を超える海外大学と学生の交流協定を結び、塾生の留学や海外大学からの学生受け入れを行ってきました。海外の大学や研究機関との研究連携も進んでいます。個人間で築き上げてきた研究の実績を土台に、これをグループ間に展開した海外連携協定の数も増え、理工学や医学を中心に15を超える海外の大学や研究機関との間で国際連携研究が進行しています。海外大学から博士課程学生の副指導教授を慶應義塾へ迎え、その研究などに参加頂くクロス・アポイントメント教授制度も運用3年目に入りました。ものづくり特別基金を設け、博士課程学生や若手教員研究者が海外の大学や研究機関に出かけて行う共同研究の支援体制も整ってきました。

伝統的な研究大学が研究や高度人材の育成の在り方などについて共通の場で議論し、現在の状況を共有し、今後の方向性を探り、これを共同声明などのかたちでグローバル社会へむけて発信する目的で、Global Network of Research-Intensive University Networks (RIUN) が結成されています。この協議会のメンバーは、南アメリカとアフリカ大陸を除く地域の、9つの研究大学ネットワークで、AAU（北米62大学）、AEARU（日中韓）、C9（中国9大学）、Go8（オーストラリア8大学）、LERU（ヨーロッパ23大学）、RU11 Japan（日本11大学）、Russell Group（英国23大学）、U15 Canada（カナダ15大学）、U15 Germany（ドイツ15大学）です。

日本では第三の開国期における大学の在り方について提言や国レベルの改革が行われてきました。一方で、大学が担う研究と高度人材育成の現状を共有し、幾多の課題にむけ提言などを行う懇談会、RU（Research University）9が旧帝大と慶應と早稲田をメンバーに2009年に発足しています。2010年にはこれに東工大と筑波大が参加する形でRU11に発展し、これまでに45回の会合を重ねています。RU11は2014年のLeiden会議にRIUNのメンバーとして参加し、他のネットワーク代表とともに清家塾長がLeiden statement (THE ROLE OF THE SOCIAL SCIENCES AND HUMANITIES IN THE GLOBAL RESEARCH LANDSCAPE) に署名しています。昨年のBerlin会議を経て、今年は11月にTokyo会議が慶應義塾三田キャンパスで開催される予定です。

ICT社会は海外を益々身近なものとしてゆきます。国際化に向けハブとして港や空港の整備の重要性が議論されたのは80年代でした。それから30年、トランスナショナル時代を迎えたいま、国際的な研究大学がハブとなり、そこに世界中から学生や研究者がモビリティ高く集うことで、研究と高度人材育成に相乗効果を生んでゆく時代です。ハブとしての機能を充実しハブ間のネットワークを強めることの重要性を認識し、研究大学活動を継続してゆきたいと考えています。

第1回 理工学部ホームカミングデー 開催

理工学部長 青山 藤詞郎



学部長挨拶



眞田広報委員長からの理工学部近況報告

本年6月18日（土）、初めてホームカミングデーを開催いたしました。

理工学部・理工学研究科では、2014年の創立75年記念事業でのご支援のもとに設立されました、国際人材育成基金、慶應義塾基礎科学・基盤工学インスティテュート（KiPAS）、慶應義塾イノベーションファウンダリー（KIF）の各事業を、次の創立100年に向けて運営しています。このような中、同窓生の皆様に矢上キャンパスの教育・研究環境をご覧いただく機会を設け、定期的に情報を発信して理工学部・理工学研究科の運営を進めてまいりたいと考えています。また、毎年秋の連合三田会大会の当番年とも重なる、卒業あるいは大学院修了10年、20年、30年、40年の同窓生の皆様を対象とすることにより、各年代の結束力を強めることにも寄与したいと考え、初めてのホームカミングデーを企画した次第です。

当日は朝から晴天が広がり、約200人の同窓生が矢上キャンパスにお越しになりました。学部長の歓迎の挨拶につづいて、理工学部・理工学研究科広報委員長を務める眞田幸俊電子工学科教授から、学部と大学院の教育研究内容や特徴をはじめ、入学者選抜方法、ダブルディグリー制度や留学制度、奨学金や就職状況、創立75年記念事業によりスタートした新事業

などを紹介いたしました。さらに、新34棟に移転・新設された学生実験室や実習室、基礎科学・基盤工学インスティテュート（KiPAS）の各研究室、メディアセンター（図書館）などを自由に見学していただきました。

キャンパスの各所では、変貌したキャンパスの風景に驚く声が聞かれ、あわせて開催した懇親会は旧交を温める場として盛り上がりしました。秋の連合三田会大会に向けた結束も進み、概ね、当初の目的が達せられたと嬉しく思っております。

ホームカミングデーの企画・開催につきましては、落合正行会長をはじめ、理工学部同窓会の皆様からも貴重なご意見をいただきました。心より感謝申し上げます。

来年は、1977年、1987年、1997年、2007年卒業・修了の同窓生の皆様のご招待を予定いたしております。ホームカミングデーの継続的な開催が、理工学部・理工学研究科の発展と同窓生同士の強い結束に繋がることを願っています。



懇親会の様子



34棟4階 化学系実験室

国際情勢と留学生事情

国際交流委員長 小尾 晋之介



今年の前半、海外の社会情勢の動きには激しいものがありました。欧州へのアフリカ・中東諸国からの難民の流入はとどまる気配を見せず、英国で行われた国民投票により英国の欧州連合からの離脱が決定し、バングラディッシュやフランスのニース、ルーアン、ドイツのミュンヘンをはじめとする複数の街ではテロ行為が立て続き、トルコの軍の一部によるクーデター未遂の経緯やその後の成り行きからも目が離せません。アメリカの複数の都市でも人種差別などに端を発する発砲事件などが続いています。この理工学部報の発行は9月20日なので、本稿執筆の時点（7月末）から状況がまた大きく変化していることでしょう。

このような社会情勢のもとでは、理工学部学生やその保護者の中に留学や海外研修への参加をためらう人たちが増えるのも致し方ないことかもしれません。今年の夏休みの理工学部生向けアーヘンサマースクールは開設から10周年を迎える記念の年ですが、参加希望者は例年の半分にも達しませんでした。今年の秋以降に募集がある他の留学プログラムへの参加希望者もおそらく減少が避けられないでしょう。今のところ日本人留学生が事件に巻き込まれたという報道はありませんが、フランス留学中のカリフォルニア大学の学生が先日のニースのテロで命を落としたことを伝えつつ、アメリカの大学に広がる留学への懸念について論じた記事がありました¹。これによれば、大学の間では欧州の社会情勢を危惧して、欧州への学生派遣プログラムそのものを控える動きがあるそうです。この記事の結びでは、世界のどこにでも危険はあること、その中でも留学プログラムを続けることの大事さを訴える声があることなどを訴えています。慶應理工学部生には広い世界を見分けてほしいのですが、派遣する側の大学としてどこまで安全に責任を持てるのか、悩ましい時代になりました。

さて、矢上キャンパスで学ぶ留学生の様子についてもお伝えしたいと思います。2003年の大学院理工学研究科「先端科学技術国際コース」開設以来、留学生に対して日本語学力を条件とせずに入学の門戸を開き、研究・授業履修から修了までを英語でも可能としたため、出身国の多様化が進みました。手元の2010年からの統計によれば、矢上キャンパスで学ぶ留学生（大学院生）の累積総数は1155人、出身国は54か国（地域）にわたりました。そのなかから過去7年間の累積数の多い5か国をひろい、年ごとの留学生数の推移をグラフにしたのが図1です。ダブルディグリー協定によりフランス人留学生が増加する一方で中国からの留学生は減少を続けています。日本学生支援機構のまとめによれば、2015年5月1日現在、日本で学ぶ留学生は208,379人のうち、留学生数の多い国（地域）は中華人民共和国（94,111人）、ベトナム（38,882人）、ネパール（16,250人）でした。それに韓国、台湾が続きます。国全体でみた留学生出身国の構成と比べると矢上キャンパスはユニークです。矢上ではフランス以外の欧州各国からもダブルディグリーや交換協定などによって来日する留学生が増加傾向にありますが、中国の大学との連携が弱いことがそのまま数値となって表れてしまいました。

個人が留学先を選択する際に大学の世界ランキングが一定の目安として使われるならば、報道にもあるように、最近の日本の大学の順位低迷は憂慮するべきことかもしれません。一方で、大学として何らかの働きかけをすれば、欧州の協定校のように、選ばれた学生を大勢迎え入れることも可能です。理工学部・理工学研究科としては、大学のランキングの向上を気にかける一方で、レベルの高い協定校との連携を深めることにリソースを割くべきでしょう。大学により提供されたプログラムの中で行き来する以上、塾生の留学先での安心・安全をある程度担保できることにもなります。混迷する世界情勢の中で、大学間パートナーシップの重要性はますます高まっていると言えるでしょう。

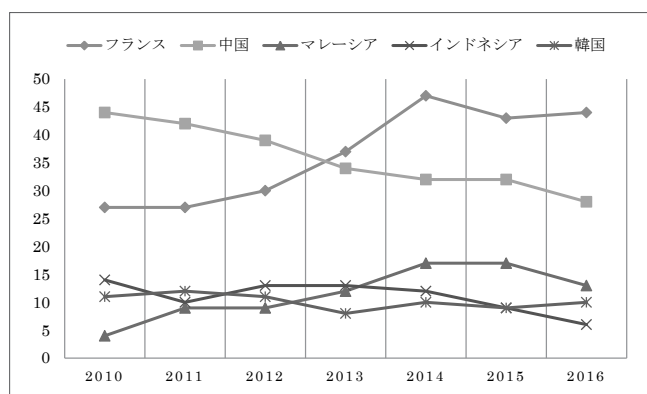


図1 理工学研究科留学生の出身国別人数の変化（累積数上位5か国）

¹ Emily Deruy, “After Terror in France and Unrest in Turkey, Schools Grapple With Whether to Send Students Abroad,” The Atlantic, July 20, 2016.

慶應義塾先端科学技術研究センター (KLL) から 産業界への技術発信

慶應義塾先端科学技術研究センター 所長 鈴木 哲也



慶應義塾先端科学技術研究センター (KLL) は2000年に発足し、2016年に創立17年を迎えました。KLL では理工学部の産官学連携の窓口として、国および企業からの受託・共同研究を管理・運営し、研究成果の社会還元を目的としています。昨今、国内外や産業界の状況変化に伴い研究成果を社会還元する方法や大学への期待度も、大きく変わりつつあります。社会・産業界からの大学への期待度が増している現状を受け、更なる産官学連携を推進すべく、KLL の活動を広げています。

KLL の重要な役割の一つであるリエゾン活動では、これまでは主に各教員の技術を単独の企業と結び付ける活動を実施してきました。しかし、それだけでは不十分で産・学・官のそれぞれの強みを活かしたオープン・イノベーションへの期待が高まっています。そこで、KLL のリエゾン活動体制を見直し、2014年度からは新たに産官学連携コーディネーターを採用し、新体制のもと活動をスタートさせました。神奈川県、横浜市、川崎市、相模原市、大田区等の地方自治体、およびその附属機関である神奈川県産業技術センター等とも密接に連携し、国や地方自治体の予算を積極的に獲得し、それを基に地域企業とも連携するように進めています。これまで点と点を結び付けてきたリエゾン活動に、複数教員と複数企業とを結び付けて理工学部の組織色を鮮明にしていく手法を取り入れることで時代の要請に応えられるよう努めています。

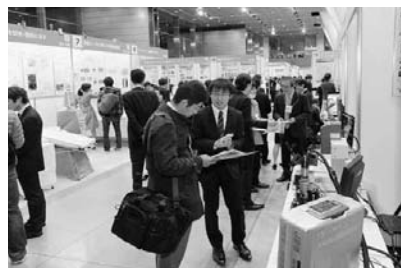
産官学連携の動きを活性化させるための取組みとして、地元地域 (横浜・川崎) の中小企業との連携を支援するマッチングファンドの制度を新たに指定研究プロジェクトの下に設けました。また、既存の指定研究プロジェクト一次世代先端分野探索研究も産学連携志向の高い若手研究者を重点的にサポートできるように制度改正を行い、2016年度から開始予定です。この制度新設・改正を受けて、選考委員には、民間資金獲得実績がある教員の意見を反映できるように KLL 規定を改正しました。さらに、指定研究プロジェクトの下に、慶應義塾発ベンチャー企業の設立を目指す大学院生等を対象としたインキュベーション支援の制度を設け、活動資金 (助成金) と36棟2階で空室となっている KLL スペースをインキュベーション施設として提供する制度を2016年から実施します。

最後に、KLL の情報発信の重要な機会である慶應科学技術展 (KEIO TECHNO-MALL) においても、様々な新しい工夫を試み、産官学連携のきっかけとなる出会いの場を生み出す努力をしています。2015年12月に開催した KEIO TECHNO-MALL では1,554名の方にご来場いただき、会場では活発な議論や意見交換が繰り広げられました。(写真2-4) 会期後には開催報告のウェブサイトを開設し、当日の会場で発表された出展者の技術シーズ資料や各イベントの動画を掲載する等、KEIO TECHNO-MALL の広報活動を精力的に行っています。

これからも開かれた研究拠点として更なる先導的役割を担うべく、KLL の活動を推進してまいります。今後ともご理解、ご協力賜りますようお願いいたします。



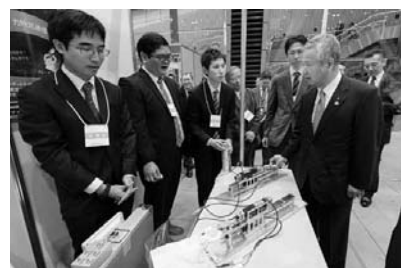
1 理工学部施設見学会



2 テクノモール 展示ブース



3 テクノモール
トークセッション「脳・心と幸せ」



4 テクノモール
甘利前経済再生担当大臣のブース見学

15年を迎えた「矢上賞」 —同窓会研究教育奨励基金による表彰—

理工学部同窓会副会長 小尾 晋之介



理工学部・理工学研究科の改組を含む「理工学部創立60年・同窓会設立50年記念事業」では1999年2月からの13カ月間で約5000名を超える同窓生から多額の募金を得ることができました。そのうち7,500万円が同窓生の社会的に顕著な活躍や社会貢献を表彰する「慶應義塾大学理工学部・大学院理工学研究科同窓会研究教育奨励基金」として基金化されましたⁱ。その基金を原資として、2001年から卒業生を対象とした表彰が行われています。2013年には制度の浸透を目的として在学生・卒業生にも親しみのある名称が運営委員会内で検討された結果「矢上賞」と呼ばれるようになりました。2013年以前の実績もあわせて「矢上賞受賞者」として登録されています。

これまでの受賞者一覧は理工学部ウェブサイト上 (www.st.keio.ac.jp) にまとめられていますので、詳細はそちらをご覧ください。受賞者数は2016年までの累計74人（うち修士課程修了54人、さらに博士課程まで修了23人）で、卒業学科別の内訳は機械工学科13人、電気工学科21人、応用化学科13人、計測工学科7人、管理工学科4人、数理工学科3人、数理科学科1人、物理学科6人、化学科4人、物理情報工学科1人、他大学ⁱⁱ1人です。学部卒業から受賞に至るまでの年数をグラフにしたものが図1です。卒業後20年ごろから30年ごろの間に受賞者の多くが分布しています。1996年の学部改組以降に設置された新学科からは物理情報工学科を除いて受賞者はまだ輩出しておらず、これからの活躍が期待されます。

受賞者の活動の場は様々で、国内企業人34人、大学関係者18人、国立研究所等11人、その他自営業など6人で、そのほかにアメリカの大学や企業で活躍されていた方は5人いらっしゃいました（いずれも受賞時）。対象となる活動も最近の業績から長年の功績まで様々です。卒業後の年数が長い4人の方には表彰の際に「功績賞」の副題がついています。

2015年度には試みとして「矢上賞（起業支援）」というカテゴリーを設けて、卒業・修了後まもなく事業を立ち上げた個人・グループを対象に審査し支援を行うことにしました。その贈呈式の様子は理工学部ウェブサイト上で報告されていますが、一般の受賞者と比べてみな若く、大学からのお墨付きをもらえたことを一様に喜んでおられたのが印象的でした。

2016年度の表彰式ならびに受賞者による講演会は別掲のとおり10月1日（土）に矢上キャンパスで行われます。例年、卒業生・教員・OB・研究室関係者・現役学生など大勢が出席するなかで受賞者から表彰に至った活動を中心に講演していただきますが、その内容はとても興味深く、同窓生の多彩な活躍に触れることができるのは大きな喜びです。講演会の後は場所を移し、受賞者を囲んでリラックスした雰囲気でのレセプションが設けられます。現役学生にとっては自分自身のキャリアパスのヒントが得られる場でもあります。

同窓生により設けられた基金により同窓生を表彰するというスタイルは独特で、義塾ならではのスタイルではないかと思えます。卒業生と大学のつながりが今後も長く続き、いずれは矢上賞を経てノーベル賞を受賞するような卒業生が誕生することを期待したいと思います。

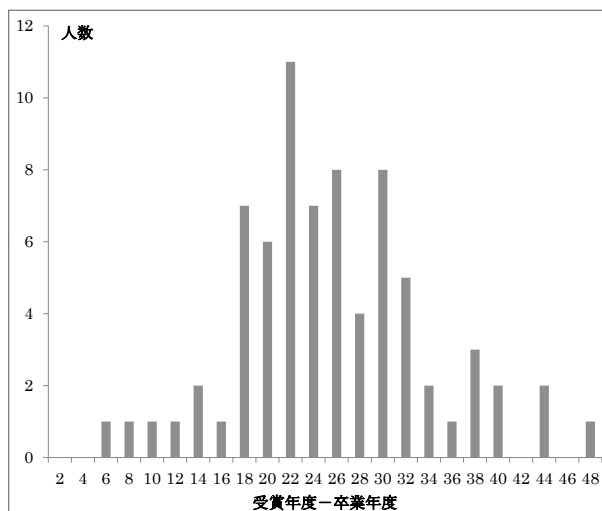


図1 「矢上賞」受賞者の卒業年数（受賞時）

ⁱ 慶應義塾大学理工学部75年史，発行：慶應義塾大学理工学部（2014）

ⁱⁱ 大学院理工学研究科で修士・博士学位取得



矢上賞 同窓会研究教育奨励基金による卒業生への授賞

同窓会研究教育奨励基金では理工学を原点として、これまでに社会的に顕著な活躍や、研究教育活動などをとおして多大な社会的貢献を果たされている卒業生を奨励するため、矢上賞の表彰事業を行っています。

16回目となる今年度は、10月1日（土）15時から、矢上キャンパス創想館において以下4名の方を表彰いたします。

梶原 昭博 君（電気工学専攻後期博士課程 1991年修了 北九州市立大学 理事・副学長）

秩父 重英 君（電気工学科 1986年卒 東北大学多元物質科学研究所 教授）

小林 慶行 君（応用化学科 1986年卒 Daiichi Sankyo India Pharma Private Limited CEO & President）

有本 博一 君（化学科 1988年卒 東北大学大学院生命科学研究科 教授）

また、当日はあわせて2015年度矢上賞（起業支援）の表彰を行います。

渡辺 祐樹 君（物理情報工学科 2005年卒 カラフル・ボード株式会社 代表取締役 CEO 兼 SENSY 人工知能研究所 代表）

竹 康宏 君（電子工学科 2010年卒 ドリコス株式会社 代表取締役）

稲川 琢磨 君（開放環境科学専攻修士課程 2013年修了 株式会社 WAKAZE 代表取締役社長）

谷本 龍一 君（生命情報学科 2014年卒 人工知能型ブックマークアプリ立案チームメンバー）

授賞式典ならびに講演会には参加費無料、事前申込み不要で参加していただけます。

詳細は理工学部ウェブサイト (<http://www.st.keio.ac.jp/ygprize/>) をご覧ください。

教育への新しい風

井貫 晋輔 (助教)：化学科／基礎理工学専攻 生物化学専修

専門：有機合成化学、天然物合成、生物有機化学

2011年3月に国立大学で博士の学位を取得後、民間企業の研究員としての3年間（2011年4月～2014年3月）の勤務を経て、2014年4月に本塾理工学部化学科に助教（有期）として着任し、本年（2016年）4月より助教となりました。本塾に着任して2年が過ぎ、ようやく大学教員としての仕事にも慣れてきました。日々、意欲的な学生達と共に目標に向かって切磋琢磨するという有意義な時間を過ごしています。

専門は、有機合成化学、天然物合成、生物有機化学であり、有機化学を基盤として、分子レベルで生命現象の解明することを目指し研究を行っています。特に生体防御を担う機能である、自然免疫機構、また自然免疫と獲得免疫の連携機構を中心に、鍵分子となる小分子化合物の化学合成を行い、免疫機構の解析、制御に取り組んでいます。これらの研究活動を通して、幅広い視野を有した創造力豊かな人材の育成に貢献できればと思います。



萩原 学 (助教)：応用化学科／総合デザイン工学専攻 マテリアルデザイン科学専修

専門：無機合成化学、セラミックス材料科学、材料物性

他大学にて博士号を取得後、2013年に助教（有期）として応用化学科に着任し、本年4月より専任の助教となりました。専門は電子部品に用いるセラミックス材料の合成と物性評価です。セラミックスは陶磁器に代表されるように古くから知られている材料ですが、最近でも面白い特性を持った新材料が次々と発見されており、その奥深さに魅了されて日々の研究に励んでいます。

慶應義塾に来てから早3年以上の月日が過ぎましたが、毎年新緑の季節になって少し汗ばみながら矢上の坂を登ると、学位を取りたてで右も左もわからずに着任した1年目のフレッシュな気持ちを思い出します。最近では少しずつ色々なことに慣れてはきましたが、どうすればより良い研究ができるのか、どうすれば学生の成長につながるのかなど、まだまだ模索する毎日です。これからも初心を忘れることなく、学生たちとともに成長し、研究や教育を通して社会の役に立てよう努力していきたいと思っています。



山田 秀 (教授)：管理工学科／開放環境科学専攻 オープンシステムマネジメント専修

専門：品質管理、実験計画法、データ解析

2016年4月の管理工学科着任から四半期が経過し、矢上の坂を息切れなく登れるなど身体面は適応でき始めたようですが、教育、研究面では不十分です。私は1993年に博士（工学）を頂いた後、教員生活の第1章を工学部で11年間、第2章をビジネススクールで12年間過ごしました。事実をデータで把握しそれを解析するための理論、方法、事例、推進組織などを研究しています。データ収集、解析の対象として、製品、サービスの品質を主に取り上げていて、顧客満足が得られる製品、サービスの企画、設計段階での不具合未然防止、シミュレーションによる品質の作り込みなどがあります。

品質の善し悪しは提供者ではなく顧客が決めます。大学の顧客は誰かについて、様々な考えがあります。私は学生やその親族、就職先の企業だけでなく、社会全体を考えるのが、総合大学として持つべき見識と考えていて、着任後その思いが確固たるものになりました。教員生活の最終である第3章では、慶應義塾大学での教育、研究を通じて、大学の顧客たる社会に貢献できるように努力します。どうぞよろしくお願いいたします。



機械工学科の近況

機械工学科主任 泰岡 顕治



本年度より学科主任を務めさせていただいております。4月には、荻原直道准教授が教授へ、尾上弘晃専任講師が准教授に昇格されました。また、堀田篤教授が7月から6ヶ月間の特別研究期間を取得し、日本学術振興会科学研究補助金（国際共同研究加速基金）を利用してカリフォルニア大学サンタバーバラ校の Glenn Fredrickson 教授とポリマー複合材料の共同研究のために現地に滞在しています。

昨年度末には2年生が釜山国立大学（韓国）の学生と釜山近郊の工場を見学しました。また、延世大学（韓国）の学生を慶應に迎えて、国内3社の工場見学を行いました。工場見学だけでなく学生同士の交流を通して、互いに多くの刺激を受けました。今年度は、延世大学への訪問と釜山国立大学からの受入に加えて、新たにタイの大学の学生との国際交流および現地工場の見学も企画しています。国内のみでなく、海外にも目を向けてグローバルな視点で活躍できる人材育成を目指しています。

（機械工学科ウェブサイト <http://www.mech.keio.ac.jp/>）

電子工学科の近況

電子工学科主任 斎木 敏治



電子工学科では今年3月に竹康宏助教（有期）が退職され、4月には田中貴久助教（有期）が新たに着任されました。寺川准教授が福澤諭吉記念慶應義塾学事振興基金による1年間の留学期間を終え、入れ替わって湯川准教授が同基金にてドイツ・ベルリン工科大学に4月から1年間の予定で留学しております。2年続けて若手教員にこのような機会を与えていただいた理工学部の暖かいサポートに厚くお礼申し上げます。彼らの経験は近い将来、理工学部全体へ還元できるものと確信しております。

世界規模で電気業界の再編が急激に進む昨今、私たち教員には多様で効率的な教育が求められてきております。また、年々変化する学生の気質に対して、迎合せず柔軟に対応する難しさも増すばかりです。手探りで最適な答えを探中、OB・OGのみなさま方からのご助言、メッセージは心強い支えになります。折に触れ叱咤激励いただきたく、よろしくお願い申し上げます。

（電子工学科ウェブサイト <http://www.elec.keio.ac.jp/>）

応用化学科2016

応用化学科主任 今井 宏明



本年2月に、吉田圭祐助教が任期満了によって退職され、4月から、小椋章弘助教（有期、有機合成化学）がメンバーに加わるとともに、佐藤隆章専任講師（分子有機化学）、高橋大介専任講師（分子生命化学）、緒明佑哉専任講師（材料化学）、が准教授に昇格されました。これによって、教授・准教授21名、さらに客員教授1名を含む総勢31名の教員陣による充実した教育研究体制が整ってきました。最近の活発な研究成果は、教員や学生の多数の受賞として表れています。詳細を当学科のウェブサイトで紹介しておりますので、是非ご覧下さい。また、応用化学科の卒業生は本年3月に7369名を数えております。このような大勢のOBOGとの広く深いつながりを財産として大切に、さらにそれを十分に活用しながら優れた人材を社会に送り出すべく活動をおこなっていく所存です。卒業生の皆様からの温かいご支援を今後ともよろしくお願い致します。

（応用化学科ウェブサイト <http://www.applc.keio.ac.jp/>）

物理情報工学科の近況

物理情報工学科主任 田中 敏幸



的場正憲教授の後を受け、本年度から学科主任を務めさせていただいております。物理情報工学科では、今年3月に相吉英太郎教授が退職され、4月には堀豊助教（有期）が新たに着任されました。今年度も教員25名で教育及び研究に取り組んでいます。

学科3年の科目群は、完全な4学期制に対応しています。第1学期末試験終了後には、海外の大学のサマーセッションや海外インターンシップに参加することが可能になっています。物理情報工学科ではそのような希望の学生が自主的に準備できるように、2年生のカリキュラムも工夫しており、国際的に活躍できる学生を育てていく努力をしています。また、就職試験も視野に入れた授業内容の科目も用意しており、学生が社会へ出るための準備ができるように配慮しています。学科の情報は下記ウェブサイトで公開しております。

（物理情報工学科ウェブサイト <http://www.appi.keio.ac.jp/>）

管理工学科の近況

管理工学科主任 栗田 治



本年度より4年目の学科主任を務めております。教室幹事は松浦峻専任講師、学習指導副主任は松林伸生教授です。管理工学科では教員一同（23名）が一致団結して学科教育に当り、研究を進めています。

人事報告ですが、田中健一先生（OR）が准教授に昇格しました。新任は山田秀教授（統計学、筑波大学より）ならびに鵜飼孝盛助教（有期）（OR、東海大学より）です。一方、長年尽力された飯田孝久専任講師（統計学）が3月末に定年退職されました。

管理工学科の「人＆モノ＆情報に関連して組織や社会のよきあり方を探る」という理念に貫かれた教育の重要性は益々大きくなっているように思われます。固有の科学技術の発達と、それを組み合わせて人々の幸せのために用いるソフトな知恵は、車の両輪として機能せねばならないからです。ここ数年で大いに若返ったスタッフ一同は、基礎教育を益々充実させてゆくとともに、今日的な問題にも果敢にチャレンジしてまいります。

教育・研究に関するご助言・ご提案がございましたら、どうぞお知らせ下さい。なお当学科では、学生の工場見学にも積極的に取組んでおり、卒業生の皆様をお願い申し上げることもあろうかと存じます。今後とも何卒宜しくお願い致します。

（管理工学科ウェブサイト <http://www.ae.keio.ac.jp/>）

数理科学科の近況

数理科学科主任 田村 明久



学科主任2期目に入りました田村明久です。今年度は教室幹事の服部広大専任講師、学習指導副主任の田中孝明准教授とともに学科運営にあたります。

今年3月に仲田均教授が定年退職されました。一方4月より厚地淳教授、小林景准教授、早野健太専任講師が着任し、高橋博樹専任講師が准教授に昇格しました。

昨年度からの検討課題であった部屋使用法の変更により、学科受付が6階から5階に移動しました。505と506の壁を取り払い、一部にシリーズ本の書架を置き、図書室のスペース増と共に機能的な受付としました。旧受付を「数理コモンルーム」と名付け、教職員、学生が自由に議論をしたり、セミナーをしたり、勉強ができる居心地の良い部屋へと順次改装中です。また院生室を学部4年生にも利用できるようにし、学生諸君が使いやすいスペースとなることを目指しています。

今後も数理コモンルームへの図書配置など学生の住環境・教育環境の改善、研究活性化および教員の研究時間の充実を目指しています。

（数理科学科ウェブサイト <http://www.math.keio.ac.jp/>）

物理学科の近況

物理学科主任 白濱 圭也



物理学科では、4月に能崎幸雄准教授（磁性物理）が教授に昇格し、また新たに永合祐輔助教（低温物理）を新任で迎えました。スタッフは総勢24名（うち1名はKiPAS 特任助教）となり、全力で教育・研究に取り組んでいます。

昨年度の大きな出来事として、23棟2階の旧応化学生実験室の一部が配分され、学生実験と理論研の新たなスペースとなったことが挙げられます。これにより、手狭だった22棟1階の3年実験室から4テーマが23棟に移動し、安全にも十分配慮した教育が行えるようになりました。研究面においても高いアクティビティを発展的に保っており、研究に立脚した大学院生の教育にも手応えを感じています。物理学という普遍的な学問を武器に、社会で活躍する人材の輩出を目指します。今後OB・OGの皆様のご指導ご鞭撻を、よろしくお願い致します。

（物理学科ウェブサイト <http://www.phys.keio.ac.jp/>）

化学科の近況

化学科主任 垣内 史敏



本年度より山田徹教授の後を受け、学科主任を務めております。化学分野で取り扱う内容は近年広く、深くなっていますが、10研究室に所属する教員20名の協力のもと世界を牽引できる研究を行っています。昨年度の教員の退職はなく、本年度も教授8名、准教授2名、専任講師4名、助教6名で、学生の教育・研究ならびに学科の運営に当たっています。昨年度は、数カ月間の短期ではありますが、若手教員が海外留学する機会を得て、研究の視野を広げることができました。本年度は博士課程への進学者も増え、社会的な要望が特に大きくなっている博士号取得者の育成と社会への輩出を行う体制も順調に整っています。グローバルに活躍できる学生の育成を目指した新しい取り組みにも着手し、国際的に活躍する研究者の育成を行う新体制づくりも始めました。今後さらなる発展のために様々なことに挑戦する化学科を目指します。皆様からの変わらぬご支援をお願いいたします。

（化学科ウェブサイト <http://www.chem.keio.ac.jp/>）

システムデザイン工学科の近況

システムデザイン工学科主任 伊香賀 俊治



システムデザイン工学科は、2016年4月に学科創設21年目を迎えました。20年前に、機械工学科、電気工学科、計測工学科に籍を置く有志教員24名で、“ものづくりに携わる人材”、“ものづくりを目指す組織をリードする人材”を育成する新たな教育・研究体系を確立すべく創設されました。その後、建築と航空宇宙の領域を拡張し、現在、教授16名、准教授9名、専任講師2名、助教2名の合計29名の体制となっています。当学科出身の教員も6名（准教授4名、助教2名）に増え、時間的・空間的に複合したダイナミクスを解析し、制約条件や評価規範も含めてモデル化し、新しい価値を創出し、技術者も芸術家と同じように、真っ白いキャンバスに、「モデル化」という筆を用いて、「システム」という絵を描く、創造活動ができる優秀な人材を社会に輩出し続けるべく取り組んでおりますので、今後とも皆さまのご支援をよろしくお願いいたします。

(システムデザイン工学科ウェブサイト <http://www.sd.keio.ac.jp/>)

情報で未来のカタチを

情報工学科主任 寺岡 文男



20世紀後半になって個人を時間的、場所的な束縛から解放する情報を扱う技術が発展しました。さらに21世紀に入り、情報は人だけでなくロボットのような知的機械から日常のありふれた物までもを対象とするようになりました。情報を有機的に効率よく交換するための情報通信ネットワーク技術、未来を正しく理解し情報を把握して人間の役に立つように処理するメディア工学、さらにこれらの技術を基盤として支えるコンピュータ科学をコアにして、最短距離でイノベーションを実現できる人材を養成することが情報工学科の使命であると考えています。すなわち、ベンチャーや大企業、官・学術界、国内外の幅広いフィールドで情報・数理の理解と経験に基づいて、身につけた情報技術を基盤に未来の社会システムに社会実装できる人材や、新しい社会への変革を先導できる人材を養成することが情報工学科の目的であると考えています。

(情報工学科ウェブサイト <http://www.ics.keio.ac.jp/>)

生命情報学科の近況

生命情報学科主任 岡 浩太郎



3月まで主任を務められた榊原康文先生の後を受けて、本年度より岡が主任となりました。榊原先生は、当学科への学生不人気（STAP細胞のため?!）をV字回復させるのにご尽力されました。本年度からは、大学院学習指導副主任を佐藤智典先生、学部学習指導副主任を宮本憲二先生、教室幹事を佐藤健吾先生にお願いしています。また一昨年9月よりIST オーストリア研究所に「脊索動物を特徴付ける形態形成機構の解明のための研究」のテーマで留学していた堀田耕司先生が昨年8月に帰任されました。留学経験を生かし、研究・教育活動に邁進されています。今年3月には宮本研究室からの論文“A bacterium that degrades and assimilates poly(ethylene terephthalate)”がScience誌に掲載されました。PET分解酵素（PETaseとMHETase）を見いだすことに成功し、世界的に注目されています。

(生命情報学科ウェブサイト <http://www.bio.keio.ac.jp/>)

日吉の近況

一日吉カリキュラム検討委員会の役割

日吉主任 萩原 真一



理工学部1・2年生が日吉キャンパスで履修する科目の一つに総合教育科目があります。この総合教育科目は理工学部が独自に設置したものと他学部が設置したものとに分かれ、他学部設置のものはそれに併設をかけることによって理工学部生も履修できる仕組みになっています。学部同士が併設を掛けあっている総合教育科目は日吉共通科目と呼ばれ、その数は毎年、650あまりに及んでいます。この膨大な数の科目群を維持・管理・運営するために学部横断的な組織として設立されたのが日吉カリキュラム検討委員会です。各学部の日吉主任・学習指導主任、9つの検討部会長などから構成される本委員会は、年7回開催され、多種多様な総合教育科目群を統括する重要な任務を担っています。2017年度から総合教育科目改革を実施する理工学部は、一部の科目の廃止を行う予定ですが、当科目に他学部から併設がかかっている場合、日吉カリ検が調整役を務めることになります。

大学院教育と専攻

基礎理工学専攻長
高野 宏



戴下聡教授の後を受けて、2016年度より専攻長を務めさせていただきます。

本専攻は、数理学、物理学、分子化学、物理情報、生物化学、生命システム情報の6専修から成ります。昨年度の専修組織改革により、各専修が大学院教育により大きい責任を持つことになりました。具体的には、今年度入学者から修士課程のカリキュラムが変わり、指導教員の所属する専修が用意した「主専門」科目群から8単位以上を取得することが修士課程修了要件に加わりました。また、指導教員の所属する専修以外の専修が指定した「副専門」科目群から必要単位数を取得することで、副専門修了を得ることができます。修士課程修了の場合、成績証明書には「主専門【分野名】修了」と記載されます。副専門修了の場合、同様に「副専門【分野名】修了」と記載されます。ここで、「分野名」は各専修の専門分野の名称です。各専修の主専門・副専門科目群等は http://www.gakuji.keio.ac.jp/yagami/new_curriculum.html をご覧ください。

独創を生むための組織

総合デザイン工学専攻長
岡田 英史



本年度から、佐藤徹哉前専攻長の後を受けて専攻長を務めることになりました。

科学技術の高度化・専門化に伴い、理工学部の約7割の学生が大学院修士課程に進学していますが、新しいものをつくりだす人材の育成が大学院教育の目的の一つであることに変わりはないと思います。

糸川英夫は、「古今の独創性をもった人たちの歩んだ道を、克明に調べると、「根性」「学習」「出会い」という三つが残る。」と記しています[独創力－他人のできないことをやる－(1982)]。「根性」は個人の資質にかなり依存するところがあるとしても、「学習」と「出会い」は、組織の影響が大きい要因であると言えるでしょう。「学習」については、主専門－副専門制を柱とする新カリキュラムが今年度から修士課程でスタートしています。3大専攻制の特長を活かし、新たな独創を生み出す「出会い」の場として専攻をさらに発展させるべく、構成員の皆さんとアイデアを出し合ってゆきたいと考えています。

専修改組後の専攻の役割

開放環境科学専攻長
天野 英晴



昨年の専修改組の結果、開放環境科学専攻は、空間・環境デザイン工学、環境エネルギー科学、応用力学・計算力学、情報工学、オープンシステムマネジメントの5専修体制となりました。改組により、専修は、大学院教育、入試を担う主体として位置づけられました。開放環境科学専攻は、非常に広い研究分野をカバーし、それぞれ方法論も価値感も異なるため、全専修で統一的に動くことは困難かつ弊害が大きいです。むしろ専修になるべく大きな自由度を持って動いてもらえる体制を作ることが重要と考えています。このため、専修に予算や業務を移動し、専攻は、博士学位の審査と、入試、教育において全体として最低限守るべき線を決めてしっかり守ることに徹し、なるべく目立たず、負担にならず、会議は速やかに終え、しかしやるべきことは疎漏なくやっていこうと思います。話題に上らないのが良いこととなります。皆さまのご理解を賜りたくお願いします。

博士課程教育リーディングプログラム

（オールラウンド型）「超成熟社会発展のサイエンス」 完成年度を迎え1期生はプログラム完了へ

プログラムコーディネーター／理工学研究科・総合デザイン工学専攻 教授 神成 文彦

2012年から学生を採用して進めてきた本プログラムは2016年度で完成年度となり、2つの修士号を取得し、かつ産業界のメンターに継続した指導を受けてプロジェクトを熟してきた1期生がいよいよ修了します。1期生には7名の理工学研究科の学生がおり、いずれも2年で博士課程を修了し産業界・省庁にその活躍の場を求めべく活動を行っています。現在、プログラム全体では50名の大学院生が塾全体から参加しており、今年度は商学研究科と文学研究科から理工学研究科に2つ目の修士号を取得するために学生が入学しました。今年の秋には全国62プログラムが一堂に会するフォーラムの幹事校を慶大が務めます。プログラムの文科省支援終了まで今年を含めて残り2年。その後の新しい博士課程教育の方向性と戦略を巡らせながら、学生も教員も高い志をもって頑張っております。お時間がありましたら、土曜の午後、日吉西別館（旧 KBS）にお越しいただければ活動の一端をご披露いたします。

（「超成熟社会発展のサイエンス」ウェブサイト <http://plgs.keio.ac.jp/>）



（複合領域型（環境））「グローバル環境システムリーダープログラム」 社会に羽ばたく修了生

理工担当／理工学研究科・開放環境科学専攻 教授 植田 利久

理工学研究科と政策・メディア研究科の連携で運営されているグローバル環境システムリーダープログラム（GESL）は、今年度、理工学研究科では、あらたに7名（博士課程：3名、修士課程：4名）の学生を迎え、博士課程3年生から修士課程1年生まで総勢33名の学生が、政策・メディア研究科の19名の学生とともに意欲的に活動しています。本プログラムでは、本年3月、4名の修了生を輩出することができました。2名が理工学研究科の学生、2名が政策・メディア研究科の学生です。近年、博士学位を取得した学生は、ポスドクなどの有期研究員としてさらに経験を積み、本来の仕事に進んでゆきます。4名の修了生も、大学の有期助教やポスドクなどの職につき、それぞれの目標に向かって、より高度な研究などに意欲的に取り組んでいます。今後、毎年本プログラムの修了生が社会に巣立ってゆきます。本プログラムで学ぶ学生諸君に、どうぞご期待ください。

（「GESLプログラム」ウェブサイト <http://www.gesl.st.keio.ac.jp/geslhp/>）



最近の就職状況について

理工学部 就職担当委員長 津田 裕之

1. 2016年3月卒業・修了者就職状況

2015年度は、経済状況の好転とともに学生の就職活動は概ね順調に推移しました。学部卒業生の23%が就職し、就職者の内訳は、理系就職が49%、文系就職が51%で、修士課程への進学率は72%でした。また、修士課程修了生の88%が就職し、理系就職が83%、文系就職が17%で、博士課程への進学率は8%でした。これらの傾向は例年どおりで、大きな変化は見られませんが、文系就職の割合が学部・大学院ともに増えています。また、就職した学生の中で学校推薦制度を利用した学生は学部で25%、修士で40%、学部・修士を合わせて34%でした。次ページに就職先企業一覧を示します。5名以上就職した企業への就職率は42%で、昨年度より増加しています。なお、3月末時点での就職活動者は、学部6名、大学院7名で、学部の在学期間延長制度利用者は4名でした。

2. 2017年3月卒業・修了者就職活動状況

求人社数は6月時点で953社であり、その中で学校推薦を利用する会社数は昨年よりも20社増え155社となり、企業の採用意欲の高さが感じられます。

新しい就職活動日程では、採用選考は学部4年あるいは修士2年の6月開始となっていますが、多くの学生は3月以降ジョブマッチングと言われる配属希望部署での面接を受け、OB・OGリクルーターとの面談を行い、これを通して、学生と企業がお互いに絞込みを進めました。6月現在、企業が学生に内々定を出し始め、就職活動の正念場を迎えています。

7月以降も内々定が得られない場合には、就職担当委員を中心に、学生の心が折れないように丁寧な就職支援を継続する予定です。8月には、その時点で採用を継続している企業と学生とのマッチングをとる就職活動継続者向け企業セミナーを、9月には進路変更者向けの企業セミナーを行う予定です。このような支援を行いつつ、9月中にはほぼ全員の進路が決まることを期待しています。

3. 2018年3月卒業・修了者向け就職支援と今後の展望

2018年3月卒業・修了予定者については、前年と同様に、学部3年あるいは修士1年の3月に採用広報活動開始、その3ヵ月後の6月に選考開始となる日程に合わせて就職支援を行っていく予定です。但し、「勉強と研究に励むことが最強の就活」であるとして焦らずに勉学に取り組むよう促し、進路については親族と本音の話し合いをするように伝えます。その後の、自己・職種理解、業界研究、エントリーシート対策、面接対策等の実用系の講座についても、前年と同時期に開催予定です。企業のOB/OGを招いた就職セミナーは、OB/OGと学生がコンタクト出来る場として、今年は採用広報活動開始時期に合わせて3月に実施し多くの学生が参加しましたが、4月に実施した職種別セミナーは参加者が減少しました。このような学生の動きを踏まえ、2018年3月卒業・修了者向けに行う来年のOB/OGによる企業研究セミナーや職種別セミナーは、企業の広報活動が開始される3月上旬に集中させ、効率的な企業研究を進められるよう計画しています。公務員志望者対象のセミナーについては、早くから試験対策が必要なこともあり、11月または12月に行う予定です。また、学校推薦制度をより多くの学生に有効に利用してもらうべく各就職担当委員は数十社の人事担当者や面談し、企業側の求める人材や採用スケジュールなどの情報を得て、学生と企業との橋渡しを行います。理工学部・理工学研究科として、勉学と研究の時間を確保して学生の実力を高め、希望の進路に結びつくように学生に対する支援を引き続き行いたいと思います。

2015年度の就職状況

表 2015年9月と2016年3月卒業・修了者の2名以上就職先 (学部・修士合計数)

就 職 先	計	就 職 先	計	就 職 先	計
日立製作所	25(5)	リコー	4(2)	スクウェア・エニックス	2
野村総合研究所	21(5)	三井物産	4	セイコーエプソン	2
キヤノン	20(1)	資生堂	4(1)	ナビタイムジャパン	2
トヨタ自動車	20(4)	新日鉄住金ソリューションズ	4(1)	フューチャーアーキテクト	2
東芝	19(3)	大和証券	4(1)	ヤフー	2
富士通	16(4)	東レ	4(2)	ローム	2
三菱重工業	12(2)	東京海上日動火災保険	4(1)	ワークスアプリケーションズ	2
日本電気	12(1)	東日本旅客鉄道	4(3)	伊藤忠テクノソリューションズ	2
エヌ・ティ・ティ・データ	11(4)	日本アイ・ビー・エム	4(2)	宇宙航空研究開発機構	2(1)
東日本電信電話	11(3)	日本生命保険	4(1)	横浜銀行	2(1)
パナソニック	10(1)	日本電信電話	4	九州電力	2
三菱電機	10(2)	富士ゼロックス	4(1)	慶應義塾	2
三井住友銀行	9(1)	J F E スチール	3	国際石油開発帝石	2
東京都	9(4)	S M B C 日興証券	3(1)	三井住友信託銀行	2(1)
日産自動車	9(1)	アビームコンサルティング	3	三菱瓦斯化学	2(1)
日本放送協会	9(3)	いすゞ自動車	3	三菱商事	2
L I X I L	8(1)	サントリーホールディングス	3(1)	三菱総合研究所	2(1)
アクセンチュア	8	シスコシステムズ	3	住友電気工業	2
ソニー	8	ファナック	3	新潟原動機	2
東京瓦斯	8(2)	みずほ証券	3	千代田化工建設	2
東京電力	8(1)	関西電力	3	川崎重工業	2
エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ	7(1)	三井住友海上火災保険	3(1)	損害保険ジャパン日本興亜	2(1)
ソフトバンク	7	三菱化学	3	大成建設	2(1)
新日鉄住金	7(1)	出光興産	3	大林組	2(1)
本田技研工業	7	大和総研	3(2)	第一生命保険	2(1)
デンソー	6(1)	電通	3	竹中工務店	2
旭化成	6(1)	東陽テクニカ	3	朝日新聞社	2(1)
花王	6(1)	日本航空	3(1)	島津製作所	2
大日本印刷	6(1)	日本貿易振興機構	3(1)	東芝キャリア	2
東海旅客鉄道	6	日本郵船	3	東芝メディカルシステムズ	2(1)
日揮	6	野村證券	3	特許庁	2
J X 日鉱日石エネルギー	5(2)	J F E エンジニアリング	2(1)	日清食品	2
K D D I	5	J S R	2(1)	日本テレビ放送網	2
キーエンス	5	T O T O	2(1)	日本ユニシス	2
ブリヂストン	5(2)	アサヒビール	2(1)	日本設計	2(1)
みずほフィナンシャルグループ	5(1)	アステラス製薬	2(1)	富士フイルム	2
旭硝子	5	アルファシステムズ	2	武田薬品工業	2(2)
三菱東京UFJ銀行	5	エヌ・ティ・ティ・ドコモ	2(1)	豊田自動織機	2
小松製作所	5(1)	オリエンタルランド	2(1)	豊田通商	2
日本総合研究所	5(3)	オリンパス	2(1)	その他1名就職企業	279(53)
I H I	4	カルチュア・コンビニエンス・クラブ	2(2)	合 計	876(166)
N T T ファシリティーズ	4(2)	クインタイルズ・トランスナショナル・ジャパン	2	合計内訳：学部229名(57名)、修士647名(109名) 卒修者数：学部976名(170名)、修士739名(119名) ()は内数で女子	
デロイトトーマツコンサルティング	4	コーセー	2(1)		
リクルートホールディングス	4	ゴールドマン・サックス証券	2(1)		

昨年との比較

上位6社：日立製作所(昨年8名)、野村総合研究所(13名)、キヤノン(同16名)、トヨタ自動車(同17名)、東芝(同16名)、富士通(同20名)
5名以上就職した企業への就職者数：372名、42.5%(昨年343名、40.4%)

2名以上68.4%(昨年68.9%)

公務員：16名(昨年6名) 中学高校教員：6名(昨年7名)

博士課程の進路

修了者と単位取得退学者：85名中、企業等への就職者 27名(東芝、東洋合成工業、住友電気工業、三菱電機株式会社、産業技術総合研究所、日本マイクロバイオファーマ、アクセンチュア グローバル、SUMCO、いすゞ中央研究所、株式会社風力エネルギー研究所、東日本旅客鉄道、日本電気、パナソニック株式会社、塩野義製薬、カイオム・バイオサイエンス、シスメックス、日本オクラロ、スタンレー電気、三菱重工業株式会社、他)、在職ドクターの復職者10名、大学等

(大学や学術研究機関の有期ポスト、学振特別研究員4名を含む)への就職者18名、就活中・未定9人、帰国5人、訪問研究員等4人、国家公務員1人、起業1人、不明10人

留学生の進路

学部卒業者(6名)

日本にて進学5名、母国に帰国1名

修士修了者(36名)

日本にて就職11名、進学5名、就職活動中3名、未定2名
母国にて就職6名、進学2名、就職活動中1名、未定6名

博士修了者と単位取得退学者(18名)

日本にて就職3名、母国にて就職10名、就職活動中1名、その他4名

受賞

- 松川 弘明「日本経営工学会・学会賞（学術）」
受賞日：2015年5月16日
授賞者：公益社団法人 日本経営工学会
- 山中 直明「平成26年度（第52回）電子情報通信学会業績賞」
受賞日：2015年6月4日
授賞者：一般社団法人電子情報通信学会
- 河野 健二「IBM Faculty Award」
受賞日：2015年7月2日
授賞者：IBM
- 大槻 知明「平成27年度電子情報通信学会フェロー」
受賞日：2015年9月9日
授賞者：電子情報通信学会
- 伊藤 公平「第9回応用物理学会フェロー表彰」
受賞日：2015年9月13日
授賞者：公益社団法人 応用物理学会
- 栗野 祐二「IEC1906賞」
受賞日：2015年10月5日
授賞者：国際電気標準会議
- 閻 紀旺ほか
「優秀講演論文表彰（The 8th International Conference on Leading Edge Manufacturing in 21st Century (LEM21), Best Paper Award）」
受賞日：2015年10月20日
授賞者：日本機械学会生産加工・工作機械部門
- 高橋 大介「平成27年度東京糖鎖研究会奨励賞」
受賞日：2015年10月24日
授賞者：東京糖鎖研究会
- 井上 正樹ほか「2015年度計測自動制御学会論文賞」
受賞日：2015年10月27日
授賞者：公益社団法人 計測自動制御学会
- 長坂 雄次「粉生熟技術振興賞」
受賞日：2015年11月5日
授賞者：公益財団法人 谷川熟技術振興基金
- 小茂島 潤・竹村研治郎ほか
「Best Paper Award (Society-wide Micro and Nanotechnology Forum)」
受賞日：2015年11月17日
授賞者：2015 ASME International Mechanical Engineering Congress & Exposition
- 山口 高平
「情報システム学会 第11回全国大会・研究発表大会・ベストペーパー賞」
受賞日：2015年11月21日
授賞者：一般社団法人 情報システム学会
- 桂 誠一郎
「システムコントロールフェア2015/計測展2015 大学・高専テクニカルアカデミー研究発表コンテスト奨励賞」
受賞日：2015年12月4日
授賞者：公益社団法人 計測自動制御学会
- 山中 直明「Best Paper Award」
受賞日：2015年12月8日
授賞者：IEEE Communications Society Globecom2015
- 井上 正樹
「Automatica Outstanding Reviewer for 2014-2015」
受賞日：2016年2月10日
授賞者：The International Federation of Automatic Control (IFAC)
- 河内 卓彌「平成27年度有機合成化学奨励賞」
受賞日：2016年2月18日
授賞者：公益社団法人 有機合成化学協会
- 戸嶋 一敦
「2015年度有機合成化学協会 第一三共・創薬有機化学賞」
受賞日：2016年2月18日
授賞者：公益社団法人 有機合成化学協会
- 桂 誠一郎「第12回日本学術振興会賞」
受賞日：2016年2月24日
授賞者：独立行政法人 日本学術振興会
- 牛場 潤一「平成27年度中谷賞奨励賞」
受賞日：2016年2月26日
授賞者：公益財団法人 中谷医工計測技術振興財団
- 杉山由希子ほか
「2015年度日本音声学会学術研究奨励賞」
受賞日：2016年3月18日
授賞者：日本音声学会
- 米長 泰明「第33回日本化学学会学術賞」
受賞日：2016年3月26日
授賞者：公益社団法人 日本化学学会
- 緒明 佑哉「第65回日本化学学会進歩賞」
受賞日：2016年3月26日
授賞者：公益社団法人 日本化学学会
- 須藤 亮ほか「2015年度日本機械学会賞（論文）」
受賞日：2016年4月21日
授賞者：一般社団法人 日本機械学会
- 米長 泰明「第48回市村学術賞貢献賞」
受賞日：2016年4月25日
授賞者：公益財団法人 新技術開発財団
- 山口 高平・飯島 正・森田 武史ほか
「情報システム学会設立10周年記念優秀論文賞」
受賞日：2016年5月14日
授賞者：一般社団法人 情報システム学会
- 田中 健一・栗田 治ほか「年間優秀論文賞」
受賞日：2016年5月20日
授賞者：公益社団法人 日本都市計画学会
- 足立 修一ほか「システム制御情報学会産業技術賞」
受賞日：2016年5月26日
授賞者：一般社団法人 システム制御情報学会
- 柿沼 康弘ほか「The Best Paper Award」
受賞日：2016年5月26日
授賞者：49th CIRP International Conference on Manufacturing Systems
- 加藤 健郎「平成27年度秋季研究発表講演会 優秀発表賞」
受賞日：2016年5月27日
授賞者：公益社団法人 日本設計工学会
- 桑田 文「第13回日本独文学会賞（日本語論文部門）」
受賞日：2016年5月28日
授賞者：日本独文学会
- 杉浦 壽彦ほか「学術奨励賞」
受賞日：2016年6月7日
授賞者：一般社団法人 日本非破壊検査協会
- 志村 啓・松尾亜紀子「弾道学研究会奨励賞」
受賞日：2016年6月23日
授賞者：弾道学研究会
- 佐藤 春樹「日本機械学会環境工学部門功績賞」
受賞日：2016年6月30日
授賞者：一般社団法人 日本機械学会

新任

●教授

管 理 工 学 科 山田 秀 品質管理／実験計画法／データ解析 数 理 科 学 科 厚地 淳 確率論／拡散過程／幾何学的関数論

●准教授

数 理 科 学 科 小林 景 理論統計学／統計的機械学習／ベイズ予測

●専任講師

数 理 科 学 科 早野 健太 4次元多様体／写像の特異点

●助教

機 械 工 学 科 志村 啓 (有期) 高エネルギー物質／固気二相流／燃焼 管 理 工 学 科 鵜飼 孝盛 (有期) 数理モデル・最適化／都市解析／地域医療
電 子 工 学 科 田中 貴久 (有期) 半導体物理／デバイスモデリング／ナノ構造 物 理 学 科 永合 祐輔 低温物理学／超流動／超伝導
応 用 化 学 科 三浦 洋平 構造有機化学／超分子化学／安定ラジカル 化 学 科 井貫 晋輔 有機合成化学／天然物合成／生物有機化学
応 用 化 学 科 萩原 学 無機材料化学／電子セラミックス／強誘電体 システムデザイン工学科 小池 綾 (有期) 工作機械／加工監視・制御／付加加工
応 用 化 学 科 小椋 章弘 (有期) 有機合成化学／全合成／天然物／反応開発 情 報 工 学 科 杉浦 裕太 (有期) ライフスタイルコンピューティング
物 理 情 報 工 学 科 堀 豊 (有期) 制御理論／合成生物学／最適化 大学院理工学研究科 (KIPAS) 春日 翔子 (有期) 計算論神経科学／運動学習／ヒト相互運動学習

昇格

●教授

機 械 工 学 科 萩原 直道 バイオメカニクス／解剖学／自然人類学 システムデザイン工学科 小檜山雅之 構造物の性能設計・最適設計／防災システム
物 理 学 科 能崎 幸雄 磁性物理学／スピンダイナミクス／ナノ物性

●准教授

機 械 工 学 科 尾上 弘晃 マイクロナシステム／バイオファブリケーション 応 用 化 学 科 緒明 佑哉 材料化学／結晶材料／有機・無機高分子材料
応 用 化 学 科 佐藤 隆章 天然物化学／有機合成化学／新規合成法開発 管 理 工 学 科 田中 健一 システム最適化／都市空間解析
応 用 化 学 科 高橋 大介 糖鎖／ケミカルバイオロジー／生体機能分子 数 理 科 学 科 高橋 博樹 力学系／カオス／分岐／エルゴード理論

退職

●教授

	在職期間	専門	現職
物 理 情 報 工 学 科 相吉英太郎	1980/4/1～2016/3/31	最適化／ニューラルネット／力学系ベース計算	
数 理 科 学 科 仲田 均	1978/4/1～2016/3/31	エルゴート理論／測度論の数論	慶應義塾大学非常勤講師
システムデザイン工学科 飯田 訓正	1980/4/1～2016/3/31	燃焼診断／内熱機関／ライフサイクルアセスメント	慶應義塾大学特任教授／慶應義塾大学非常勤講師
情 報 工 学 科 岡田 謙一	1978/4/1～2016/3/31	協調作業支援／グループウェア	情報通信メディア研究所理事長／慶應義塾大学非常勤講師

●専任講師

管 理 工 学 科 飯田 孝久	1980/4/1～2016/3/31	データ解析／多変量解析／実験計画法	慶應義塾大学非常勤講師
システムデザイン工学科 西 美奈 (有期)	2014/4/1～2016/3/31	低環境負荷燃焼技術／固体酸化物形燃料電池の実用的研究	

●助教

機 械 工 学 科 佐藤浩一郎 (有期)	2013/4/1～2016/3/31	設計理論／設計方法論／デザイン工学／CAD	千葉大学 准教授
電 子 工 学 科 竹 康宏 (有期)	2015/4/1～2016/3/31	再構成可能型回路／システム LSI／無線通信	ドリコス株式会社代表取締役
応 用 化 学 科 吉田 圭佑 (有期)	2013/4/1～2016/2/29	有機合成化学／天然物合成／有機触媒	京都大学化学研究所特定助教
情 報 工 学 科 千代 浩之 (有期)	2014/4/1～2016/3/31	リアルタイムシステム／オペレーティングシステム	産業技術大学院大学助教

追悼

鈴木 登紀男先生

名誉教授の鈴木登紀男先生が平成27年11月30日に94歳で逝去されました。恩師鈴木先生は慶應義塾大学工学部（藤原工業大学）の1期生として卒業後、電子工学・半導体工学の先達として多くの学生を育てられ、本学部の発展に多大な貢献をされました。昭和30年にはフルブライト奨学生として米国ペン

シルバニア大学に留学され多くの先進的な技術を持ち帰られました。幼児期の米国体験もあってか常にデモクラティックでリベラルなお考えをお持ちの先生は、平等、清廉潔白、誠実、面倒見がよく、通称トキさんの名で多くの方々から親しまれ、慕われました。山岳部、無線工学研究会でのご活躍、

アマチュア無線、ゴルフ、ドライブなど豊富な趣味をお持ちで、晩年にはスイスの山に登るのだとドイツ語の勉強を再開されるなど、その行動力には驚かされました。その和やかな笑顔を想い出しつつ、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

（名誉教授 南谷晴之）

柘植 秀樹先生

名誉教授柘植秀樹先生が平成28年5月20日に逝去されました（享年74歳）。先生は昭和40年に本大学工学部をご卒業後、昭和43年本大学助手に着任されました。その後昭和48年に工学博士を取得され、昭和63年に教授にご就任されました。応用化学科では化学工学研

究室を主宰され多くの卒業生を輩出されました。化学工学の分野では単一気泡の運動に関して研究業績をあげておられ、平成18年度に化学工学会学会賞を受賞されました。また日本海水学会会長や化学工学会理事を務められたほか、日本学術会議海水科学研究連絡委

員会委員長、日本技術者教育認定機構（JABEE）運営委員会委員も務められました。一方ご趣味として、水泳と絵画を楽しんでおられました。先生のこれまでの教育業績とお人柄を偲び、心よりご冥福をお祈りいたします。

（応用化学科教授 寺坂宏一）

「理工学部創立75年記念モニュメントの設置」

2012年4月から開始いたしました理工学部創立75年記念事業募金は、目標金額を超えるお申し込みをいただき、2014年9月をもって予定通りに終了することができました。ご寄付を賜りました皆様のご厚志に心より感謝申し上げます。

理工学部創立75年事業として掲げた、「国際人材育成基金の設立」、「慶應義塾基礎科学・基盤工学インスティテュート（KIPAS）の設立」、「慶應イノベーションファウンダリー（KIF）の設立」についても着実に歩みをすすめております。

2016年3月、矢上キャンパス34棟1階エントランスホールに、ご支援いただいた皆様のお名前を刻んだ記念モニュメントを設置いたしました。矢上キャンパスにお越しの際には、ご覧いただけますと幸いです。



慶應義塾大学のスピントロニクス研究

物理学科 能崎 幸雄



スピントロニクスとは、物質中の電子の自転運動（スピン）を利用して、電気と磁気の両方を用いて様々な機能動作を実現する研究分野です。異種金属を原子層レベルで規則正しく積み重ねた金属人工格子において、電気抵抗が磁場によって大きく変化する巨大磁気抵抗（GMR）効果が1988年に発見されて以降、現在では磁性物理学研究のメインストリームの一つとして大きく注目されています。さらに、材料科学分野でもスピンドバイスの飛躍的な高性能化を可能とする新材料の開発が盛んに行われており、お互いに高い相乗効果を生んでいます。このようなスピントロニクス研究の応用例には、消費電力が極めて低く、記憶密度、動作速度が高いデジタル記憶（究極のメモリ）や、スピンの波としての性質を利用した量子演算（究極の暗号システム）、機能動作を書き換え可能なインテリジェント高感度センサー（究極のセンサー）などがあり、次世代デバイスの新技術の有力な候補として期待されています。これまでの日本の産業を支えてきた半導体・エレクトロニクス産業は、従来型デバイスの原理的境界の問題（トランジスタの微細化がデバイスの高性能化につながるムーアの法則が微細化技術の限界により破綻する問題）に直面しており、これらの性能限界を打破できるスピントロニクス技術の実用化が渴望されている状況です。このようにスピントロニクスへの期待が高まっている一方、スピントロニクス研究には、ナノメートルスケールの微細加工技術（図1）や、ナノ秒以下の高速なスピン運動を電氣的に捕らえる高周波プローバ装置（図2）、ナノスケール磁性体のスピン構造の時間変化を観察する技術（図3）など最先端技術が不可欠なため、小規模研究グループの分野参加が難しい側面もあります。慶應義塾大学では、このような困難を克服するため、2009年3月よりスピントロニクス研究センター（センター長：伊藤公平 教授）を立ち上げ、学部・研究科横断的な全塾的組織としてスピントロニクス研究を推進しています。さらに、慶應義塾大学、東京大学、大阪大学、東北大学の連携により、省エネルギー・スピエレレクトロニクスデバイスの実現を目的とした「スピントロニクス学術研究基盤と連携ネットワーク」拠点の整備計画が文部科学省「学術研究の大型プロジェクトロードマップ2014」に採択され、世界的な協調と競争の中心に我々のネットワークを据える活動を開始しました。このように、義塾はスピント

ロニクス研究分野で重要な役割を期待されており、世界をリードする研究成果の発信も求められています。今後の義塾のスピントロニクス研究に注目してください。

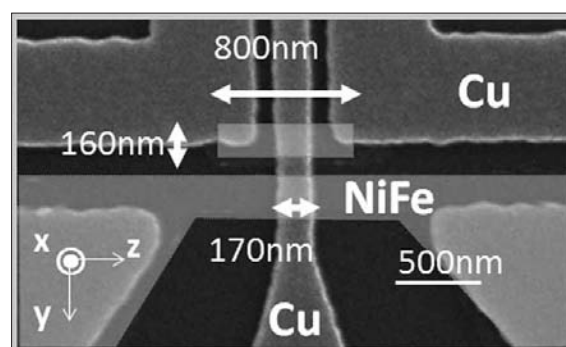


図1 試作したナノスケール磁性体のスピンドायナミクス変調素子の写真



図2 スピントロニクスデバイス評価用の高周波プローバ装置

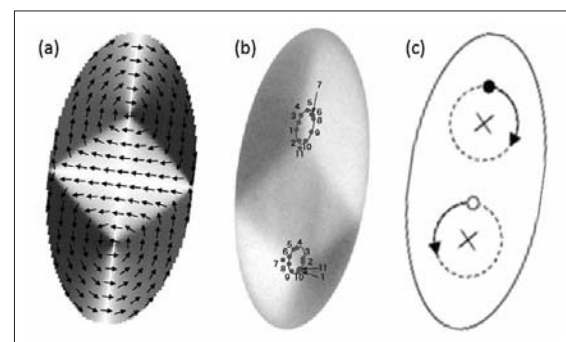


図3 SPring-8で観察した磁気渦対ダイナミクスの実時間観察 (a)楕円形状の強磁性体に閉じ込めた磁気渦対の構造、(b)磁気渦対のPEEM像、(c)実時間観察の結果明らかになった磁気渦対の動き

日吉は今



Take the GIC Challenge!

ディル, ジョナサン

Have you taken the GIC Challenge yet? GICというのはGlobal Interdisciplinary Coursesのことです。名前が示唆している通り、国際的または学際的な授業内容を提供し、このグローバルな時代に活躍できる人材を育てるために作られたプログラムです。GICセンターはスーパーグローバル大学創成事業の一環として2014年11月に設立されたのち、2015年よりいくつかの授業の認定を始め、2016年4月から正式にそのプログラムが動き出しました。GICのプログラムは、科学の最先端を目指す理工学部生にとっても、視野を広げ、語学力を磨くための絶好のチャンスです。

GICにより認定された授業の中から40単位以上取った学生には、GIC修了認定証が授与されます。この認定証は、就職の際にも自身の国際的な志向を示す良い証になるはずです。また、GIC認定の授業を、40単位とはいわずに、例えば2単位取るだけでも十分に意味があります。自分のニーズに合わせた興味のある事柄について英語（または、その他の外国語）で勉強することは、新しい発見をもたらすに違いありません。GICはこのようなフレキシビリティのあるプログラムですから、関わりかたは学生のみなさん次第です。

2016年度は95人の理工学部生がGICセンターの設置科目を履修しています。このほか、他学部が提供するGIC認定科目も多くの理工学部生が履修しています。課題が残るとすれば、理工学部設置科目の中でGICの認定を得ている授業が少ないことでしょうか。GICには二種類の科目があります。ひとつはコア科目（基礎的な科目）で、もうひとつはリサーチ科目（専門的な科目）です。コア科目を取りたい理工学部生にはたくさんの選択肢がありますが、リサーチ科目は数が限られています。GICの授業として認定されるためには担当教員の許可も必要ですので、この課題の解決には少し時間がかかるかもしれません。とはいえ、理工学部にもGICに関心のある教員は多数いるので、将来的には理工学部設置のリサーチ科目が増えていくことが期待されます。

日吉で開講されているグローバルリーダーシップセミナーと並び、GICはグローバルな人材の育成をリードする刺激的な場となっています。So if you haven't taken the GIC Challenge yet, why not?



第17回矢上祭の開催について

本年も矢上祭の時期が近づいて参りました。多くの塾生、教職員、学校関係者、企業の方々、地域住民の方々の皆様にご協力いただき、本年で17回目となります。

矢上祭の3本の軸である「理系」「エコ」「地域密着」という伝統を受け継ぎながらも、新たな試みも計画しており、皆様をお迎えする準備を委員一同行っている最中です。科学の実験を体験できる科学館、研究室の一部を紹介する研究室ツアー等の理系らしい企画に加えて、高校生に参加していただくレベルの高いクイズ大会、キャンパスライフなどについて現役理工学部生に質問できるブース等の新企画も用意しております。

第17回矢上祭のテーマは「和」です。テーマに沿った装飾をキャンパス全体に施し、矢上祭当日は矢上キャンパスを年に一度の特別な空間に演出いたします。

実行委員会一同、万全の準備のもと皆様のご来場を心よりお待ちしております。

日時：2016年10月8日（土）12:15～19:00、9日（日）10:00～19:00

場所：矢上キャンパス

矢上祭ウェブサイト：<http://yagamifestival.com/>



KEIO TECHNO-MALL 2016（第17回 慶應科学技術展）開催について

慶應義塾先端科学技術研究センター（KLL）では、理工学部・理工学研究科における研究成果を社会に還元し、産業界との連携を強力に推進することを目的として、KEIO TECHNO-MALL（慶應科学技術展）を開催いたします。本年も実物や実演を重視した展示により新しい研究成果を積極的に発表していくほか、学外から講演者を招いてのトークセッションイベント等、多彩で魅力的な内容を予定しております。ご多忙とは存じますが、多くの皆様のご来場を心よりお待ち申し上げます。

日時：2016年12月16日（金）10:00～18:00

場所：JR有楽町駅前「東京国際フォーラム 地下2階（ホールE2）」

イベント：茂木健一郎氏や隈研吾氏による各トークセッション等

※ 詳細はKLLウェブサイト（<http://www.kll.keio.ac.jp/>）をご覧ください。

理工学部報 第65号
2016年9月20日発行

発行者 武内孝治
編集 理工学部報編集委員会
責任者 勝良健史

発行 慶應義塾大学理工学部
〒223-8522
横浜市港北区日吉3-14-1
電話 (045) 566-1454 (ダイヤルイン)
印刷所 (有) 梅沢印刷所